

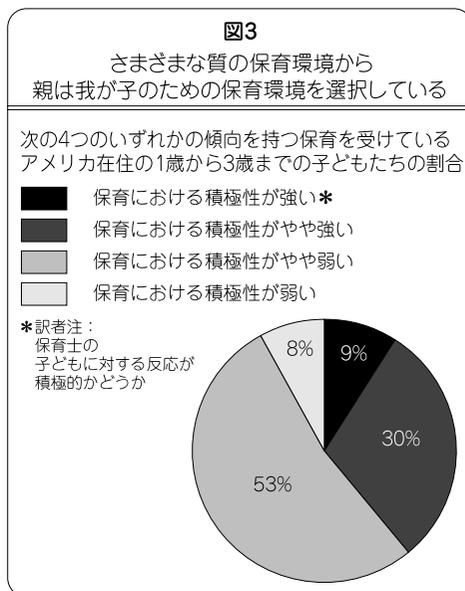
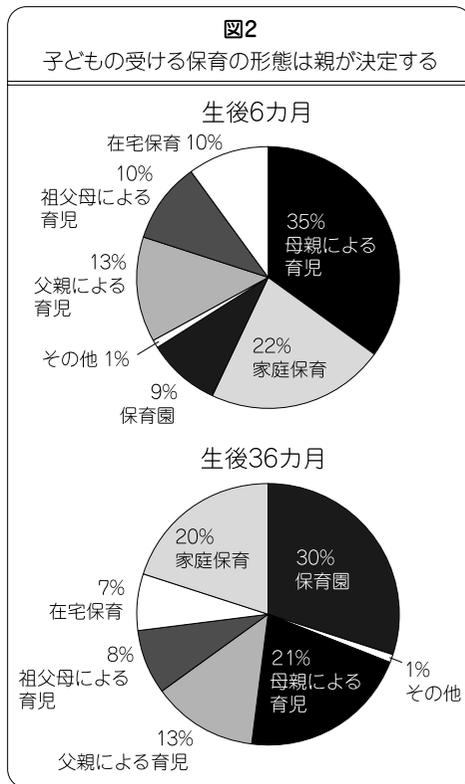
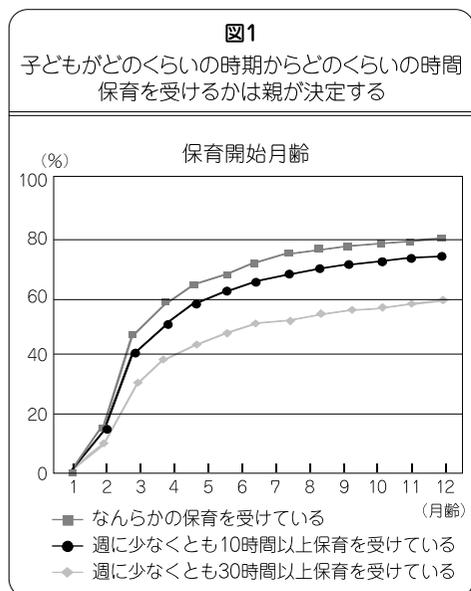
のか、何時間受けさせるのかを決めるのは両親です。

図1をご覧ください。NICHDの研究結果によりますと、6カ月児のおよそ50%が週30時間以上の保育を受けており、60%以上の子どもたちが週10時間以上の保育を受けています。この比率は、月齢を重ねるにつれて上昇します。生後12カ月までに、子どもの80%が何らかの形で、母親以外による保育を受けています。

図2は、さまざまな育児形態があることを示しています。父親や祖父母による育児、親類以外による在宅保育、家庭保育、保育園での保育などがあり、両親はさまざまな質の育児形態のなかから選択を行います。しかし、質の高い保育を利用できる可能性は限られています。米国の保育の質については、NICHDが母親の学歴、保育の種類などによって等級別に分類した保育の質の観察パラメーターを、1998年の全国家庭教育調査の対象となった米国の家族分布に適用し、測定を行いました。

図3でおわかりいただけますように、保育

士の子どもに対する積極性が強い、つまり非常に高い質の保育を受けている子どもたちの比率は、保育全体のわずか9%です。やや



質の高い保育を受けているのは 30 %。そして、あまり質の高くない保育を受けているのが 8 %となっています。

子どもの保育を選ぶのは親ですから、家庭の人口統計学的・社会心理学的な特徴により、子どもが受ける保育の特徴が予知できるといってもよいでしょう。日本社会における家族的特徴は米国とは異なるかもしれませんが、ここでは米国の研究でわかった家庭の特徴についてお話しします。

表 1 をご覧ください。生後 15 カ月の保育を分析すると、保育開始年齢、保育時間、母親以外による保育の種類や質などに最も深く関連しているのは経済的要因でした。また、母親の人間性や子育てをしながら就業することに関する考え方も、家族が母親以外の保育を選択する要因でした。生後 3 カ月から 5 カ月で母親以外による保育を受け始めた子どもの母親は、外交性、協調性において最も高い得点を得ており、母親の就業が子どもによりよい利益をもたらすと信じていました。母親以外による保育は、家族における子どもの数が少数、母親の低学歴、母親が高所得、家族

の低所得、長い就業時間、また、母親の就業が利点をもたらすと考えている場合に、より強い相関関係がみられました。

保育の種類は家族の大きさ、母親の学歴、家族構成、経済状態、母親の就業に伴うリスクについての信念に関連していました。

保育の質は、保育形態により異なっていました。在宅保育や家庭保育では、家族の所得と保育の質は正の相関関係にあります。また、保育園の保育では低所得層家庭と高所得層家庭の子どもは中所得層家庭の子どもに比べて、より質の高い保育を受けていました。以上のことから、家族の特徴が保育の選択に関連していることがわかりました。

これから私が申し上げることは、皆様にも身近な話題だと思えます。米国では、保育が家族との交流に基づく子どもの健やかな発達を阻害しているのではないかということが人々の関心事となっています。より具体的に言えば、母親や父親は次のような問いへの回答を求めているのです。

1. 乳幼児保育は、子どもの母親に対する

表1
母親以外による保育と関連する因子が可変要因に与える影響

		開始年齢	保育時間	保育の種類	保育の質
家族の特徴	子どもの人種・民族		*		*
	母親の学歴		-	*	
	同居者の有無			*	NA
経済的因子	母親の所得	*	+	*	NA
	母親以外の所得	*	-	*	NA
	所得／生活費	NA	NA	NA	+1
社会心理的因子	母親の性格と人間性	*		NA	
母親の仕事などに対する考え方と行動	仕事することの利点	-	+	*	NA
	仕事することの不利な点		-		NA
	権威的でない子育てに関する信念		+		+1

注：「+」はプラスの関係を示している。「-」はマイナスの関係を示している。「*」は関係が一定でない。「1」はある場合に關してのみあてはまることを示す。「NA」はその組み合わせ、または可変要因が分析されなかったことを示している。